

小田の幼君
北畑の名君

八陣守護城

八ッ貝切
政清本城の段
二三

〔解題〕 文化四年九月十日から道頓堀大西芝居（座本吉田芳松）興行。作者佐川藤太・中村魚岸。豊臣家の末路を材題として、加藤清正の忠烈を主とし、「厭蝕太平記」などの所傳により、清正が二條城に於て毒酒を飲まされ、熊本の本城に歸つて、豊臣氏の前途を案じつゝ遂に卒去したが、遺命によつて武裝した木像を城の天主に納めさせたといふ傳説を取つて脚色したもので、北畠春雄が小田春永の孫春若を亡して家國を我が有としようとするのを加藤朝清（後に政清に改めた）が身を以つて防止し、又その殺後の事を大内義弘・兒島政次・佐々木高綱等に委囑するといふ大筋として十一冊に仕立ててある。即ち（一冊目）大序（二冊目）小田春若館（三冊目）南巖寺門前、南巖寺（四冊目）東山假御所門前、毒酒の段、舟の段（五冊目）粟津松原（六冊目）此村屋敷、堅田浦（七冊目）お通の方館（八冊目）朝清（後改、政清）本城（九冊目）粟津陣所遠雲諫言（十冊目）次郎作（佐々木高綱）住家の段（十一冊目）兩軍和睦大團圓とかう分れて居る。

題名は、十一冊目に佐々木高綱が八陣の計をめぐらす事あるに、政清が本城に籠り死しても尙小田家を守護しようとの悲壯な末路を取合せてつけたものと思はれる。

作中の人物で、加藤政清は書き下しの時には番附面では清生朝清であつたのを、操りでは文政十一年の三度目の興行の時から加藤政清に改めて清正を利かせた事をいよく明かにした。その他お通の方は淀君、春若は秀頼、兒島元兵衛政次は又後藤又兵衛基次、佐々木左衛門高綱は眞田左衛門幸村、大内義弘は島津義弘にあてたものと思はれる。

こゝに収めた八冊目の切が全篇の山である。

進ヲシ行先は。二重に建てし思惟の間。風の聲。庭の。本草におとづれて。へ我ながら。心置く露踏分けて親ひ來人の出入りはとむれど。秋を告げくすだく蟲さへ。物凄き。我が本城の主計之助。隔ての垣に身を寄せて。

母の教への綱手繩。長堀引けばすゝ虫思ふ案じはどこへやら。あなたの事がつかへ。調都の御所より上使として。それぞとは。豫てまづ虫蠶絹が。手燭拂てしえ苦になつて。ほんに寝た間も忘れかね。主計之助參上と。堀取次ぐ母の詞より。へッ庭にあり。堀母様お越し遊ばし逢ひ度い見度いと明け暮れに。これが外に。フッ答もなき折ふし。怪しや庭たか。イザこなたへとゆふしでの。神募うて居るものを。聞えませぬと娘氣の草隠れ。現れ出でたる數多の鼠。この結ぶの縁ぞとは思ひがけなき主計之に。跡や。先なる恨み言。調ホ、尤ながハ不審しと三人がすかし眺むる間もな助。なうなつかしやと蠶絹が切戸おしらそれは内證。今日國へ歸りしは。我く。隙を停ひて樓閣へ連々として入る明け走り寄り。夢ではないかと嬉しさのみならず母御も同船。湊口より魁よと見えしが。俄に人聲はげしき物音。のフッ跡は詞もなくばかり。調ヤレ音病氣に相違あるまいがの。アイ別間の間は燈火も消えて分らぬ眞暗がり。數高し密かに。先づ何よりは父の身の上。餘人を遠ざけお身一人。お側様子は母様はじめ。誰にも言ふなと口仕へあると聞く。物忌みなりとは心得止めなれど。さうおつしやればお食もす。コレ様子聞かして下されと。堀賺少しなし。折々手箱の草の根を出しておし宥めて尋ねれど。こなたは猶も措寄にて。御祈念あるも只お一人。ム、それつて。調ア、コレ申し。久し振りで逢うた私。無事であつたか變らぬかと。上りなさるゝばかり。亥の刻よりは樓なつた一言おつしやつても。カリ不孝れたか。委細はこれにて聞きましたと。の科にはよもなるまい。堀其お心とは思ひがけなき切戸の陰。出づる葉末は易けれども。助け歸すは都へ使。我がつゆ知らず。サハ都でお別れ申してよを見て悔り。様子あかせしフッ案じ顔。は易けれども。助け歸すは都へ使。我がり。勿體ない事ながら。父様や母様を。母は娘を押し鎮め。別間に向ひ手を存命を物語れと。堀市に握つてゑいや

つと。投越す身體は堀の外。フシ鼠として給はれと。スエチ母の願ひも慈悲な縁に主計之助。その身を立つる心なるなつて逃去りけり。地主計之助は父の聲。聞く嬉しさに差寄つて。詞時政公より父への使。何にもせよ明しを照し戦國の常武士の習ひ。母上御無事と猶以つて。御身の上氣遣はしく。立歸御教書御披見下されと。地フシ縁側に直し置く。地聞きもやらず高笑ひ。詞ハ敵味方侍の義といひながら。母が悲しハ、ハ、ハ、何さ。たとへ如何なるハ、ハ、ハ、此書面見るに及ばず。日本無雙の政清を。味方に付けんなどとはあざとき計略。ヤイ主計之助。おのれ生年十七歳。忠孝信義の是非をも分たす。大切なる幼君の守護に残せし甲斐もなく。時政の甘き詞にたられと。つて給はれ待つていなう。コレ。おめ。と歸つてうせたは女に迷ふ大馬鹿者御教書などとは穢らはしと。地引裂き庭へフシ投捨てたり。地主計はハツト赤面の。詞なければ母が引取り。も戀人に離れがたなき女氣は。フシ哀れ氣に叶はいでも。助けられたる恩は恩。さる事ながら。執成しすべき三左衛門れ待つてと離絹が。夫を慕ふ娘氣に。地あの子の難儀になる事を。思ひ返は。疾くに落命いたしつらん。ガ女の呼べど詮方。なき倒れ。伏フシ沈みた

るばかりなり。嗚泣聲聞いて母柵しごらみ。小て介抱に。娘は苦しき顔を上げ。詞ナて。弓手に押立て坐したる姿。武威三陰を立出で傍に寄り。詞ナウ離絹。何ウ早まつたとは愚かの仰せ。主計様に軍に鳴響き。唐國までも今の世に。フッほうこがれ慕うても。主計殿には添はれずば。斯うなり行くは身の覺悟。怖ぢ恐るゝもことわりなり。妻は見れぬわいなう。ヤア母様か。そりや又。ア、思へばはかない私が身の上。父の旗に。お書きありしは死ぬるのを。御なせでござります。オ、驚きは尤もちの最期といふ事も今聞くまでは夢にも存じあつてか何故にと。問問ふもうろやが。コレ夫の最期もお三の業。恨む仇に暮した不孝者。その罪科が報い來。〳〵柵親子共に様子をフシ氣遣へり。主計殿は。時政公に助けられし。恩に命を捨てねばならぬ。コレ引別るゝも成果てしを。可愛い事ぢやと思召し。いひしは都にて。命を捨てよと教へる操ぢやと。諦めてたもいなう證據は殘未來は女夫にならるゝやう。取りなし離絹へ。離縁の狀を認めしは。女に心せしソレその文と。忍びの燈火さし頼み上げますと。今死ぬる身の際までも輪廻に迷ふ心根を。思ひやりつゝ惹かされず。忠義に死ぬる忤が潔白。寄すれば。涙ながらに押開き。詞ナニでも輪廻に迷ふ心根を。思ひやりつゝ惹かされず。忠義に死ぬる忤が潔白。〳〵父の仇たる時政の忠臣。森氏の娘二人の母。いちらしいや可愛いやらハ、ア健氣にも出かしたり。それに連なれば。所詮添はれぬ敵同士。縁切る胸一杯にせき上げて。とかうの詞なき添ふ身ほどある娘が貞女も育てがら。上は一旦の。恩も情もこれかぎり。ハ倒れフシ心も亂るゝばかりなり。詞ホ我が子へ立つる心の操。ホ、天晴れなア。是はつとばかりに讀みさして正體涙。ホ離絹が最期の願ひ。加藤主計之助清り離絹。敵となり味方となるもこの世にくれけるが。覺悟極めて懷刀。是にて承知致せしと。〳〵聞く聞にの葉。せめて未來は佛果の縁。結んで咽にはと突立つれば。はつと驚く母は父政清。以前に變る六具の出立ち妙くれんとこの旗に。二人が俗名書付けと母。ヤレ早まつた何事と。抱き起し法蓮華の七字の旗。主計が俗名書添へしは。親が許せし夫婦の堅め。コリヤ寂

光淨土に生を受け。妻よ夫と睦まじう。だ神も恨めしいそればかりかは夫にあなたに聲高く。調ホ、ウその歌の心は誰憚らず添ひ遂げよ。南無妙法と閉ぢる目に。不便の涙はら〜。唱ふのを見ようとて。はる〜来たは何事政清殿に對面せん。明智の大將物か。經も口の内。手負ひの耳に通じけん。と。甲斐なき骸を右左。惜しや可愛の數げより。フ欣然として出で給ひ。調エ、有難うござります。そのお許し數を露置く葉末柵も。數へ立て〜。携へ持つたる藥苞。中なる劍取出し。を聞きまして。嬉しう成佛いたします。涙々は漲りて滿ちくる汐の上。荒岬。調燒刃にあらはす足下の本心。よく見る。主計様にも覺悟とは。悲しい中に波打ち寄る如くなり。地歎きの中へられよ。地と差出せば。仔細あらんと頂も私が樂しみ。地あの世の道で待合せ。灘右衛門。息を切らして。フ驅戻り。調藏あり。とつくと眺めて拔放せば。俄一つ所に参ります。二人の母様舅御様。コレ旦那殿。小陰に忍んで様子を聞き。に一天照り輝き。北斗に映する劍の光。御息もじでとばかりにて。婆婆の名残。息子殿を助けうと追駈けた一里の松。赫々たるフシその有様。地政清はつと押ににつこりと。フ笑うて息は絶えに。原。長持へ入れ駈出す所。南無三寶と。藏き。詞これぞ北辰尊星より。授かる所の七星丸。某年來守護せし名劍。幼君取りつき抱きしめ。身も世もあらぬ多勢に無勢雲霞。跡に残つたこの狀箱。の御味方になるべき勇士を選び出し。悔み言。調生れてこの方二親の手元離れぬこの娘。よく〜思ひ慕へばこそ上書は加藤氏へ湖水の何某。お前は知。置きし甲斐あつて。今日只今劍を證據百里二百里この國へ。勇み進んで只一封押切り。調八十川のその源はかはるに來られしは。それなる船頭誠は備前人來た心根がいちらしい。夫婦となつた其日から。地國と都へ引別れ。死ぬるとも。心近江の末をみづうみ。フウハ。幼君の味方に屬する刺符の一腰。確に今迄一夜さも添臥せぬ薄い縁。結んレ心よき秀句ちやよな。地と吟する。落手仕ると。フ劍を鞘に納むれば。地

義弘にこと打笑ひ。詞ホ、ウ天晴れ眼力政清殿。かと坐し。詞ホ、ウ天晴れ眼力政清殿。片岡氏に盟約せし。わが本名を薬包に。包みかくせし劍の割符。兒嶋元兵衛政次なり。某味方に屬する上は。先君恩顧の諸侯と語らひ。スハ合戦の時來たらば。近江路に根城を構へ。美濃信濃路へ出張して。時政が多勢を切所に支へ追詰め。／＼泡吹かせ。狸親父が白髪首ひつさげんは隣内。我が方寸の胸にありと勇み進みし勢ひは。フシ軍師とこそは知られけれ。義弘につこと打笑ひ。詞ホ、ウこはをがましき兒嶋が廣言。國威たる北條に刃向ふ心底聞捨てならず。しかし小田家より恩義を受けし事なれば。只何事も餘所に見ん。今の一首に八十川やその源とあらはして主計之助を助けしは。近江源氏に隠れなき。佐々木左衛門高綱ならん。二人の軍師揃ふ上は。最早安堵の加藤氏。我も察祝仕る。始終をはかる名將の詞は鐵石うし。始終をはかる名將の詞は鐵石うし。政清を苦しめ。祈り／＼し甲斐あつて。念願届きしわが身體。フシの機にとどむべし。三左衛門の落命も。時節と諦め柵殿。葉末も共に様をかへ。都の悴が先途を見よ。さるにても嫁離絹。さぞや悴を待ちわびて。草葉の蔭を行きなやみ。迷はん事の不便やと。百鍊の明鏡を。照らすが如き兩眼に。スエ血沙を注ぐ。ばかりなり。歎きをとどめて兒嶋元兵衛。詞この上は葉末殿柵殿。この政次が附添うて。子息の安否を尋ねし上。佐々木に牒じて治國の計策。日本はおろか唐高麗。刃向ふ奴ばらみな殺し。幼君四海太平を。その機に安坐して。見物あれよ加藤殿。と突つ立ち上れば大内義弘。詞ホ、ウ勇し、

兒嶋政次。しかし天運至らずば。幼君 至らせ給へ南無妙。題目法蓮華經く 出づる本城外内輪。注連引きはえし樓
の御供して。ナホスわが本國へ來られよ く。タ、キ、唱ふる功德は先の世にやが に。端坐合掌古今の英雄。見上ぐる空
と。地残す詞は義弘が妻と妻へも末々 てぞ廻り。愛別離苦。會者定離とは聞きに星象光照らす。威徳ぞ有難き
を。諫めてフシ直ぐに歸國の船路。地女 ながら。返らぬ事をくり返しおさらば。
心の二人連れフシこなとも法の蓮葉にさらばの聲ばかり跡に。名残は升形を。